

『在明の別』の中務宮北の方にみる女性の性愛

小松, 明日佳
九州大学大学院: 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4402933>

出版情報 : 語文研究. 129, pp.11-26, 2020-06-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『在明の別』の中務宮北の方にみる女性の性愛

小松 明日佳

はじめに

鎌倉期に成立した『無名草子』においては、いくつかの物語批評、人物批評が行われている。その中では、『今とりかへばや』の登場人物である四の君についても言及がある。

四の君ぞ、これは憎き。上はいとおほどかに、らうたげにて、

春の夜も見るわれからの月なれば心尽くしの影となりけり

と詠むも、何事の、いかなるべし、と思ひて、さばかりまめに分くる心もなき人を持ちながら、心尽くしに思ふらむ、と思ふだに、おいらかならぬ心のほど、ふさはし

からぬを、

上に着る小夜の衣の袖よりも人知れぬをばただにやは聞く

と詠みたるこそ、いとうたてけれ。(二四四頁^{注1})

四の君は、主人公である女中納言と結婚する、右大臣鍾愛の姫君である。女中納言が実は女性であるためにこの夫婦関係は表面上だけのものであり、事情を知らない四の君は不思議に思いながらも強い不満を抱くようすはない。しかし、宰相中将と密通したことから、四の君は男女の仲というものを知り、言葉のやり取りしかない夫より、こちらの方に心を傾けるようになる。四の君と宰相中将が契りを交わし、さらに妊娠までしたことで、女中納言は四の君の裏切りに対して憤慨する。先に示した『無名草子』の四の君に対する非難も、

女中納言という立派な夫がいながら宰相中将に靡くとは、その批評態度は女中納言の思いに通じるものがある。この『今とりかへばや』を受けて成立した物語作品として、同じく男装の姫君を擁する『在明の別』が存在するが、そこでも男装の姫君が否定的に思う女性が存在する。本稿では、『今とりかへばや』の四の君を前提として造型されたと考えられる『在明の別』の中務宮北の方について、先行する物語を踏まえつつ、その性愛が描き出そうとしたものを明らかにする。

一 男装の姫君と結婚をしなかつた右大臣の姫君

『在明の別』は平安末期に成立した物語作品であり、巻一と巻二、三において世代交代が行われる。巻一の中心人物である右大将は、家に跡継ぎがないために男装をしている姫君である。巻二以降はその右大将の系図上の息子である左大臣が中心となって物語が展開する。

巻一において右大将は、世間から氏の長者である左大臣家の嫡子とみなされており、右大臣は自らの中君との縁談を左大臣に持ち掛ける。しかし、左大臣は、右大将が本当は女性であるために、この結婚を受け入れることはせず、話は立ち消えになる。右大将との縁談が不調に終わったために、右大

臣は中君に中務宮を通わせるようになり、中君はその北の方となる。右大将は「隠れ蓑の術」を使って垣間見をして歩く最中、従兄弟の三位中将が右大臣邸に入っていくのを目撃する。三位中将の後を追うと、三位中将は中務宮北の方となつた中君と密会を行なつていた。中務宮夫婦の仲は上手くいっておらず、北の方は夫の顔を見るのも嫌なほどであった。その中で、北の方は三位中将との逢瀬に溺れ、そうした状態にある北の方を、右大将は不愉快な存在とみている。その後、三位中将は北の方のもとを訪れなくなる。そして巻二になり、北の方は右大将の息子である左大臣と男女の仲になるが、それも長くは続かない。左大臣が自らの姪と結婚したことで北の方は生霊となり、その姪と、もう一人の妾妻に取りつき、ついには調伏され死去する。

大槻修氏は、この北の方について、「彼女の描かれ方、生き方を通して、時代社会に対する作者の文明批評を探ってみよう」とした論文の結論部で、

ある意味で、彼女は「壮烈に生きた」といえよう。両親のもと、取り決められた結婚に従い、それが心満たされぬ夫運の際でも、隠忍自重の生活を強いられたであろう平安貴族の姫君。一夫多妻、通い婚という制度下に置かれた当時の女性の日々は、あまりに暗かった。自我に目

覚め、一個の人間として、時に社会相に反逆せんとした人妻は、時に淫乱・奔放のそしりを甘受せざるを得なかつたであろうものを、中務宮卿北の方は、ある意味で、自己を押し通した「強い女性」であつたといえよう。

と述べている。大槻氏の論には、一個人としての自我を女性が持つこと、それを貫くことは、反社会的存在になることも厭わない強さを意味することが述べられている。中務宮北の方とは如何なる女性として描かれていたのか、先行する女性たちとの比較を通して、さらに分析していく。

『在明の別』は、同じく男装の姫君を中心に据える『今とるかへばや』の影響を大きく受ける作品であり、この北の方の造型においてもそれは同様である。『今とるかへばや』において、男装の姫君である女中納言の父親である関白左大臣は、右大臣から持ち掛けられた結婚話を受け、女中納言は右大臣の四の君と結婚する。一方で、『在明の別』の場合、この結婚話は左大臣が断つたため不成立に終わる。いわば、「女中納言と結婚しなかつた右大臣の四の君」という設定が、『在明の別』の右大臣の中君の造型における原点として存在しているといえる。

北の方の造型に四の君が意識されていることは、この二人の女性が、夫ではない男性と関係を持ち始める場面からも窺

える。巻二において北の方は、ある時から通つてこなくなつた三位中将を思い、独り言に歌を詠む。

例の、妻戸の御簾のもとに寄り臥して、暗き空をうちながむるに、折知り顔にこたふる萩の上風も、げにあやしきほどなれば、

あだ人の心の秋の見えしより我が身にとほる萩の上風

とぞひとりごつなる。あまりうつりやすき心も、我ながら思ひ知られ給へど、これもさてはやむまじきにや、ふとさし寄りて、

下萩の我にしなびく風ならばあだなる秋の声は知らせじ

といふけはひ、いみじくなまめかしきに、(二五二、二五四頁)

北の方の歌を聞いた左大臣は、自らに靡けばいいと歌を詠み掛ける。ここから両者の関係は始まる。

一方、四の君と宰相中将との関係が如何様に始まつたかといえは、同じく四の君が独り言に詠む歌に対して、宰相中将が歌を返すことによつてであつた。

前には人もなきに、琴の上に傾きかかりて、つくづくと月をながめて、

春の夜も見る我からの月なれば心尽くしの影となり
けり

とひとりごちたる。(中略) 押し開けて、つつまず歩み入
りたまふを、人々は中納言のおはすると思ひて驚かぬに、
ふと寄りて、

忘れぬ心や月にかよふらん心尽くしの影と見ける

は

けはひのあらぬに、(巻第一・二〇六頁)

女性の独詠歌に、それを偶々聞いていた男性が返歌をする
という形は、北の方が四の君の影響を受けた造型であることを
示唆するものであり、ここでは傍線部のような表現上の類似
もみられる。^(注4)

『今とりかへばや』において、四の君は「かういといみじく
死ぬばかり思ひ焦らるる人を心ざしあるにこそ」(巻第一・二二
六頁)と、その情熱を肌で感じて宰相中将に靡いていく。この
ことは『新編日本古典文学全集』の頭注でも、

逢瀬を重ねるうちに、四の君の心に宰相中将への愛情が
芽生え始める。肌を合わせることもなく表面だけの夫婦
を取り繕っている夫に比べて、恋に身を焦がして激しく
自分を求めてくる宰相中将のほうが愛情が深いのではな
いかと思えてくるのである。(巻第一・二二六―二二七頁)

と述べられる。一方で、この四の君を意識すると考えられる
『在明の別』の中務宮北の方が持つ性質は、四の君とは異なる
ものであった。

巻一において、右大将は北の方と三位中将の密会を垣間見
しており、そこでのようすは、

かたみにたぐひなき伸にも、女はまさりざまに、押し当

てて、いみじくまとはれたるさま、(六六頁)

中将、いみじきことをいひ尽くして、今ぞ、直衣などひ

きつくるひても、なほえ動かず、まとはれて、かたみに

しほる袖の気色、(七三頁)

と、三位中将よりも北の方の方が逢瀬に積極的であることが
描かれる。もつとも、右大将が垣間見したのは、両者が頻繁
に逢瀬を繰り返している折のものであるため、北の方が三位
中将に靡いた末のものとみなすこともできよう。

しかし、巻二において、右大将の息子の左大臣が最初に北
の方に出逢った際にも、北の方の積極性をみる事ができる。
垣間見をしていた左大臣から突然歌を詠み掛けられた北の方
は、大きく動揺することもなく、そのまま左大臣を受け入れ
る。

「あやし」と思ふべきぞかし、もとよりいたくあだめきた
る御心には、おどろかれんやは。かたへは、あまりなる

心劣りもうち添ふらんかし。されど、「かくてやみなん」
とはおほえぬや、我ながらあやしからん。(二五四頁)

そうした北の方に対して、左大臣の方が落胆を覚えるほどである。三位中将との関係についても、三位中将に徐々に靡いていった、というよりも、北の方が積極的であったとみるべきであろう。それはまた、義妹のことが忘れられない三位中将が、それと北の方を比較し、

中務の宮わたりにも、いといたくいひまとはすにこそ、
さまかはり、うちほのめくことも絶えね、まことにけ近く見んには、まばゆく、軽々しかるべきかたもうちまじりつつ、「なほ、人は、ありがたかりけり」とのみ、思ひ集むるままに、(二二〇頁)

と、その纏わりつくような振る舞いを「軽々し」と否定的に捉えていることにも窺える。中務宮北の方は、『今とりかへばや』の四の君を原点としつつ、男性が閉口するほどに性愛に執着する女性として描かれている。

二 男装の姫君と結婚した対の上と性愛

右大将は右大臣の中君とは結婚しなかったが、男性として結婚をする。相手の女性は対の上と呼ばれる、右大将の叔父

である左大将の義娘である。対の上は、母親の再婚相手である左大将から一方的な契りを強いられていた。ある時右大将がそれを垣間見し、対の上が左大将の子を身籠っていることを知った右大将は、対の上を自邸に連れ出す。そして、対の上が右大将の子として産んだのが、後の左大臣である。右大将の妻となった後、対の上は義兄である三位中将の侵入を受け、契りを交わし、身籠る。そして産まれたのが、後の中宮であった。右大将はこの妊娠を本心では不快に思っていたが、子どもが産まれることは家のためには好都合であると、表面上はその妊娠を歓迎し、両者の関係が破綻することはない。右大将が「死去」したことで、対の上は出家する。その後、女御となったかつての右大将は、対の尼に自らがかつての右大将であり、その妹として存在していることを告げる。

この右大将と対の上の夫婦関係について、宮崎裕子氏は、この〈女性同士の夫婦〉が『今とりかへばや』の趣向を取り込みながらも、まったく異なるものであり、『在明の別』にあつて〈女性同士の夫婦〉は、女性同士の親密な関係を描き出すために有用なものであり、『在明の別』に至って初めて、母娘でも姉妹でも主従でも恋敵でもない女性同士の関係が、異性愛をも凌ぐ親密さをもつて登場した」と述べている。(注5)『在明の別』の対の上も、『今とりかへばや』の四の君と同様

に、男性の侵入を受け、その結果、その男性の子を妊娠する。その過程で四の君がその男性に靡いていった一方で、対の上は二人の男性との間に子を成すが、どちらの男性にも靡くことはなかった。ここに両者の重要な相違がある。

対の上が男性と契りを交わし、その子どもを妊娠、出産することは、物語の展開上必要なことであつた。それは、跡継ぎを獲得することが、跡継ぎがいなかったために姫君に男装までさせていた、氏の長者である左大臣家の悲願であつたからである。対の上には、女性である右大将の子を産むという使命が課せられており、そのためには他の男性と契りを交わす必要があつた。こうした経緯で、対の上は、他の男性と契りを交わし、その子どもを妊娠しつつも、その男性に靡かない女性として存在した。

ここで、対の上が他の男性に靡かなかつた理由について考えてみる。義兄である三位中将との関係について、両者が契りを交わしたのは一度きりであり、そこでは、

げに、わざと心づきなきにはあらねど、世の常ならずたをやぎすぎたる御けはひに久しく染みかへりては、いとど恐ろしく恥づかしきに、一言葉の御いらへだに、え宣ひ出でず。明け方になりて、思しまどへるはてはては、いみじく心地悩ましくて、いといたう苦しげにもてなし

給へれば、いづくの言葉もなびかさむかたなく、恨みわび給へるに、(二二六、二二八頁)

と、右大将との契らぬ関係に親しんだために、契りを交わすことでは、三位中将に靡きようがなかつたことが描かれる。この、契らぬ夫との関係が当たり前であつたため、という言葉は、『今とりかへばや』の四の君が、宰相中将と初めて契りを交わした場面にも表れる。

女君は、中納言にならひて、人はただのどやかに恥づかしううち語らふことよりほかにはなきものとのみ思すに、いと押したち情けなきもてなしなるに、絶え入りぬばかり泣き沈むけはひ有様の、(巻第一・二〇七—二〇八頁)

最初の契りでは四の君も宰相中将に強い抵抗感を抱いており、逢瀬が度重なることよつて、徐々に宰相中将に靡いていく。一方で、対の上と三位中将との逢瀬はこの一度きりであつた。逢瀬が重なることが重要であるとすれば、四の君と対の上を単純に比較することはできないであろう。^(注7)

これを踏まえて、『今とりかへばや』の女中納言が、宰相中将と密通した四の君を非難する以下の発言に注目したい。

おほどかにあてにおはせん女はただなつかしうあはれなるよその語らひしもこそあはれなるべけれど、我より深く思しなびかるる方のあらんよ(巻第一・二五六頁)

「ここでは、「おほどかにあて」である女性は、「よその語らひ」という精神的な繋がりで十分なはずだと、女中納言は思っている。そして、『無名草子』では、四の君は表面的には「いとおほどかに、らうたげにて、」であると評されている。この「おほどか」という表現は、『在明の別』においては「おほどかにあえかなる御心の癖」(一八八頁)、「あまりおほどかなる御もてなし」(二二六頁)と、対の上に使われるものである。^(注8) 実際に、対の上は、右大将との夫婦関係に対して、

朝夕馴れきこえ給ふままに、かたみにいみじく思ひかはし給へるものから、おのづから、すくよかに心づきなかりし御あたりにならひ給へる人は、あやしく、もの遠くも思ひたどらるべし。さりとして、いづくに心置かるべくもあらず。(九八頁)

という思いを抱いている。対の上は男女の仲をすでに知っているために、右大将の行動を不思議に思いつつも、それによって距離を置くことはない。一方で、四の君は男女の仲を知ること、宰相中将に靡いていく。加えて、『新編日本古典文学全集』の頭注では、四の君が「春の夜も」の歌を詠んだことについて、

四の君は無意識に、「女」として愛されていないことを感じていた。好色な宰相中将は、四の君の心の寂しさを鋭

く感じとる。(巻第一・二〇六頁)

と指摘されており、男女の仲を知る以前から存在した曖昧糊とした物足りなさに、宰相中将によって明確な形が与えられたということになる。このように比較すると、『今とりかへばや』の四の君とは異なり、『在明の別』の対の上が、性愛を求めない女性であることがわかる。そしてこれは、女中納言が想定した「おほどか」な女性性は性愛を求めない、を体現したものととして、対の上が存在していることをも示す。

『無名草子』において、『今とりかへばや』の四の君は、女中納言という「さばかりまめに分くる心もなき人」を夫に持ちながらも、物思いをし、宰相中将に靡いていったことが非難されていた。一方で、『在明の別』の対の上は、右大将という「さばかりまめに分くる心もなき人」を持ち、それを不満に思うことも、他の男性に靡くこともない。対の上は、『無名草子』や『今とりかへばや』の女中納言が考える望ましい女性であったことがわかる。先に中務宮北の方を、「男装の姫君」と結婚しなかった右大臣の姫君」と称したが、対の上は、「男装の姫君と結婚し、他の男性に靡かなかった姫君」と称すことができよう。^(注9) そして、男性に靡かなかった理由として、「おほどか」な性格であり、性愛を求めないことが挙げられる。^(注10)

この対の上は、右大将と平穩な夫婦生活を送り、右大将が女

性に戻った後も変わらず仲睦まじいままであり、巻二以降はほとんど登場しない。

三 性愛を求める中務宮北の方と「愛敬」という表現

『在明の別』の中務宮北の方が、『今とりかへばや』の四の君と比して、性愛に執着する女性として存在しているという点について、その性質の描かれ方から確認する。四の君の性質としては、「子めき」「らうたげ」であることが特徴的なものとして挙げられ、『新編日本古典文学全集』の頭注にも指摘がある。四の君は、ひたすらに可愛らしく、そうした性質と、自分に情熱を向けてくる男性に惹かれることは、親和性の高い現象であるう。一方で、北の方に対して、「子めき」「らうたげ」といった表現は使われない。先に、より性愛に執着すると述べたが、この北の方に対して使われる表現としては、「あだめきたる御心」(二五四頁)、「いといたく色めきたり」(二五六頁)といったものがあり、北の方の好色性が表現上からもわかる。加えて、北の方が好色なだけの女性ではないことも、表現の上に表れている。以下に挙げる箇所では、北の方の美質が示されている。

「奥の方より、ただ今来るや、母ならん」と見れど、さい

ふばかりも見えず、いと若くをかしげにて、はなばなど
愛敬づきたるさましたり。しばしつゐて灯をうちなが
めたるまみのわたり、わざとこのましく、見まほしき人
ざまなり。(二五二頁)

女は、さいふばかりこちたき齢とも見え給はず、いとよ
きほどに、つぶつぶと肥えたる人の、いとささやかにて、
額髪いみじくをかしげにかかりて、まみのほどわららか
にはさみて、口つき愛敬づき、いと見まほしきさまぞし
給へる。(二六二、二六四頁)

ここで注目したいのは「愛敬」という美質である。「愛敬」は、『日本国語大辞典』で「愛らしい魅力のあること」の意とされる表現である。本作品では他に、巻一では右大将に、巻二以降では右大臣の大君、左大臣の妹である中宮に使われる表現である。巻一において右大将は、他人に対して素っ気ない態度を取ることが、周囲から残念がられる人物であった。それは、右大将が男装した女性であり、正体を知られないように他人と距離を取っていたためであったが、そんな右大将が珍しく女性に声を掛ける場面がある。そこでの右大将のようすは、「いみじく愛敬づき、け近きにつけて、」(六〇頁)と描写されている。ここでの右大将は、普段の素っ気ない態度とは大きく異なり、親しみやすい態度を取っている。また、

卷二以降の右大臣の大君について使われる「愛敬」についても、同様の變化をみることができる。大君は左大臣の正妻であり、「あくまで氣高くうつくしきものから、残り多く、うちとけにくさまぞし給へる。」(三三四頁)、「いみじくきらきらしう、氣高く恥づかしげなるさまぞし給へる。」(三三六頁)と、その近づきたい「氣高さ」が示されていた。^(注五)その大君が、生靈事件を契機に、夫である左大臣に対して親しむ態度をみせるようになる。

こよなき御けはひも、おのづからうちゆるび、少しうちほほ笑み給ふ時もまじれば、まして御口つきの愛敬もいと多くまさるべし。さるは、人よりも奥深く見まほしきところぞおはしける。(四〇四頁)

左大臣としては十分とは思えないものの、以前よりはうち解けた態度を取る大君に対して、「愛敬」という表現が使われている。他の箇所でも、

やうやう住み馴れ給ふままに、おのづから御笑み顔、言続け宣ふ時あるは、いと見まほしく、愛敬づきたれば、いかがはせんに思しなるべし。(四四八頁)

と、親みが増すほどにその「愛敬」が強まっていることが窺える。そして、中宮に対しては、

そこはかとなくらうたく、うつくしげなるものから、子

めき愛敬づきたる御さま、母上にぞいとよくおぼえ給へるを、(二七八頁)

と、母親である対の上に似る美質として「愛敬」が挙げられている。この対の上が、義父との間に子を成し、右大将の妻となつた後、義兄との間にも子を成した女性であることは先述の通りである。このように列挙していくと、この「愛敬」という美質が、男女関係と親和性の高いものであることがわかる。右大将や右大臣の大君は、この「愛敬」が表出しにくい人物であつたが、右大将は女性を口説くという状況、大君は夫に親しみを覚えたという状況において、この美質が他者に見えるようになったということである。北の方は好色性とともに、こうした魅力を備える人物として存在する。

加えて、この「愛敬」という表現は『今とりかへばや』では女中納言に対して特徴的に使われるものであつた。男尚侍と並べた際には、

大方はただ同じものと見ゆる御容貌の、若君はあてにかをり氣高く、なまめかしき方添ひて見えたまひ、姫君ははなばなとほこりに、見ても飽く世なく、あたりにもこぼれ散る愛敬などぞ今より似るものなくもしたまひける。(卷第一・一六六頁)

と、両者は外見が似通う一方で、その美質は異なっているこ

とが示される。この「愛敬」は後に、吉野の中君にも使われる。女中納言を忘れられないかつての宰相中将は、吉野の中君を見て、

若くうつくしげに飽かぬことなく整ひはてて、はなばなと愛敬づき見まほしきさまなど、類なしと見し人にいづくかは劣りたまへると見るも、(巻第四・四九四頁)

と、その喪失感が慰められるような気持ちになる。『新編日本古典文学全集』の頭注にも指摘があるように、ここでの「愛敬」は、女中納言の存在を前提として、吉野の中君がそれに通じるものを持つていることを示す表現として使われている。

このように「愛敬」という表現が女中納言に付与されているものであることは、『在明の別』でも意識されていると考えられるだろう。そして、『今とりかへばや』における「愛敬」という魅力が、『在明の別』では、特に異性を惹きつけるものとして扱い、作中で使用しているといえる。その結果、中務宮北の方は、専ら性愛という側面に力点を置いた「愛敬」の持ち主として、独自性を発揮することになったのである。

四 生靈事件にみる中務宮北の方の感情

左大臣の正妻である右大臣の大君は、生靈事件を契機に左

大臣への態度を軟化させる。この生靈事件とは、中務宮北の方の生靈が、右大臣の大君と、左大臣の妾妻である四条の上に取りついたものである。生靈事件と聞いて思い起こされるのは、『源氏物語』の六条御息所である。金光桂子氏は、六条御息所の生靈を下敷きに造型されている中世期における「物の怪」の一例として、中務宮北の方を扱っており、ここでは、「御息所の生靈に読み取った怨念や害意をより明確にしつつ、そうした悪霊的存在に対しても「あはれ」という感情を抱く余地を残して」いると述べている。^(注12)

左大臣が右大臣の大君と結婚したことを知った北の方は、その行動を恨めしく思う。

時しもあれ、あぢきなく、同じかざしを思しつつまぬも恨めしく、いひもてゆけば、誰があやまりならぬ前の世の契りを、返す返す思ひむすばほれ給ふに、(三三八頁)

それというのも、右大臣は北の方の兄であり、北の方と大君は叔母と姪の関係に当たるからである。自らに近しい人間との結婚が、北の方に強い恨みを抱かせ、北の方は、左大臣に對する自らのそうした思いを自覚している。その一方で、六条御息所は、

すべてつれなき人にいかで心もかけきこえじ、と思し返せど、「思ふもものを」なり。(葵)卷・三七頁

と、光源氏のことを意識しないようにと思つてゐる。そう思つてゐる時点でそれが失敗していることは続く地の文から窺えるが、六条御息所本人としては、光源氏に対してあらゆる感情を持ちたくはないと思つてゐる。

右大臣の大君に取りついた生霊によつて、大君はその容貌を交える。

なほ心ある人も見えず、御かたちもかはりたるやうにて、その人も見え給はず。いとほひやかにけ近きものから、ねたげなるまみのけしき、左の大臣はさやうにも分き給はず、父殿ぞ、いとあやしう、「思ひかけぬ人も似給へるかな」と、心得ず思さるるに、うちみじろきて、

様々に朝夕こがす胸のうちをいづれのかたにしはし
晴るけん

と宣ふけはひ、いささかその人にもあらず、違ふべくもあらぬを、父大臣のみぞ、返す返す、「あやし」と傾かれ給ふ。(三七四頁)

右大臣は、娘の姿や口振りが、妹である中務宮北の方のそれになつたことを訝しむ。

「葵」巻で光源氏は、葵の上のようすが、
のたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。

いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。

〔葵〕巻・四〇頁

と、六条御息所その人のものになつたと認識してゐる。『在明の別』では、左大臣はその変化を認識しておらず、代わりに北の方の兄である右大臣の視線を通して、それは語られる。

その後、よりまし童に移された生霊は、

はかなきことにつけても、思ふこと違ふ身の宿世を、「心憂し」と思ふに、いと離れぬゆかりにしも、思ふさまに心やすく住み馴れ給ふが、聞きたびにいとつらければ、「いづれをも、すべて、この御あたりならん人を、いたづらになしてん」としつるものを、心憂く責めわびさせ給ふこと。(三七六頁)

と騒ぐ。自分と近い人間のもとに住み慣れているのが辛い、というのは、左大臣の結婚を聞いて北の方が嘆いた理由と一致しており、両者の意識が同一であることがわかる。そして、この発言を聞いた左大臣は、その正体が中務宮北の方の生霊であることを認識する。

生霊はその後、四条の上のもとへ移動する。四条の上に移つた生霊は、伝えたいことがあると左大臣を名指しで呼ぶ。

このたびは、いとしめやかに泣きしをれて、「なほ、左大臣殿に、せちに聞こえさすべきことあり。出でさせ給へ」

と泣きまどふを、内の大殿の思しつること違ひ、ことのまぎれに、この大臣も、若き御心に、いとほしたなく、見苦しければ、「ただ、よからぬ、たぶれたる、まことならぬこといふならん。打ち込めよ」と宣ふを、いとみじく泣く。

待ちかぬるいまひとたびの逢ふことをありしながらにかぎれと思ふ

声を立てて泣き呼ばひて、覚めぬ。(三八四、三八六頁)

しかし左大臣はこれを拒否し、生霊は調伏される。生霊と死霊の違いはあるものの、「若菜下」巻で、紫の上に取りついた六条御息所の死霊が、ここでは意識されていると考えられる。光源氏は、

まことにその人か。よからぬ狐などいふものたぶれたるが、亡き人の面伏せなること言ひ出づるもあなるを。

たしかなる名のりせよ。(「若菜下」巻・二三五—二三六頁)

と、言葉の上ではその正体を確かめようとするが、「さすがにもの恥ぢしたるけはひ変らず、なかなかいと疎ましく心憂ければ、もの言はせじと思す。」(「若菜下」巻・二三六頁)と、それが六条御息所であると認識しつつ、取り合う気はない。それは、この存在が「心憂」きものだからであり、生霊が調伏されたと同時に北の方が死去したことを知った左大臣も、「我が

身の上とり添へて、「心憂し」と思ひつれど、」(三八六頁)と、同様の感想を抱いている。女性は自らの思いを、姿を変えてもなお訴えるが、それが男性に届くことは無い。

このように、北の方の生霊は、六条御息所における生霊、死霊を、統合したものであるといえる。そこで(注15)の感情には、六条御息所のように「もの恥ぢ」は含まず、自身の持つ恨めしき、辛さのみ焦点が当たっている。

六条御息所の死霊は、自らの思いを切々と述べる一方、北の方は、左大臣に拒まれた後は、泣きに泣き、歌を一つ詠んで消滅する。その歌は、「待ちかぬる」と、左大臣の来訪を待つ辛さを詠んだものであった。六条御息所もそうであったように、北の方も(待つ女)であった。(注16)そして、北の方が待っていたのは左大臣だけではなく、かつては三位中将を(待つ女)であった。

訪れない三位中将を思つて北の方が詠む歌には、「荻の上風」が詠み込まれている。「荻の上風」という表現は、藤原義孝の「あきはなほゆふまぐれこそただならねをぎのうはかせはぎのしたつゆ」(「和漢朗詠集」「卷上秋部」・二三九)での詠まれ方が代表的なものである。これを踏まえて『源氏物語』では、「時雨うちして荻の上風もただならぬ夕暮」(「少女」巻・三四頁)と、「荻の上風」を秋の時分を表すものとして使っている。そ

の後も「萩の上風」は、秋の時分を表現する表現として歌に詠み込まれてきた。その一方で、数は少ないものの、恋部の歌にも詠み込まれている。これは、秋と恋の終わりとの親和性を利用したものであろう。たとえば、『新古今和歌集』では、

あはれとてとふ人のなどなかるらん物おもふやどの萩の
うはかぜ（西行法師・一三〇七）

今はただ心のほかにきくものをしらずがほなるをぎのう
はかぜ（式子内親王・一三〇九）

と、恋も終わりを迎えつつある「巻第十四恋四部」に、この表現が詠み込まれる。特に西行の歌では、人が訪れない嘆きが明示されており、待つことへの悲嘆を窺うことができる。この二首以外に「萩の上風」が恋部で詠まれているものは、勅撰和歌集中では、『新古今和歌集』「巻第十五恋五部」、『新撰和歌集』「巻第十五恋五部」、『続千載和歌集』「巻第十三恋三部」、『新統古今和歌集』「巻第十五恋五部」に一首ずつ、確認できる。

このように、先行する女性たちの多くと同様、北の方も〈待つ女〉であった。ただ、そうした女性たちに比して、より明確に、能動的に性愛を求める女性でもあった。

おわりに

『在明の別』における中務宮北の方は、性愛を求める女性として描かれている。そこでは『今とりかへばや』の右大臣の四の君をはじめ、先行する女性たちが意識されており、これらの女性と比較することで、北の方が如何に性愛に対して積極的であるかがわかる。同じく『今とりかへばや』の四の君が意識された対の上は、北の方とは異なり性愛を求めない女性であり、『今とりかへばや』や『無名草子』が考える望ましい女性像へと変奏されている。

巻一において三位中将と北の方の密会を垣間見した右大将は、「かばかりのきはにも、かたはなるわざはまじるなりけり」（六六頁）と、高貴な女性にもこのような存在がいたのだと、不快感を覚える。性愛を求める女性に対する非難の眼差しは作品内外に存在するものであるが、中務宮北の方は、そうした非難を気に掛けることのない、自らの感情に正直な女性として描かれている。

注

『在明の別』の本文引用はすべて『有明けの別れ——ある男装の

姫君の物語——(大槻修訳注・創英社・一九七九年三月)によるが、一部表記を改めた。

注1 『在明の別』以外の引用は、散文は『新編日本古典文学全集』、和歌は『新編国歌大観』による。

注2 「中務卿宮北の方・恋の遍歴の果て」・『中世王朝物語の研究』・世界思想社・一九九三年八月、初出「萬葉・その後犬養孝博士古稀記念論集」・塙書房・一九八〇年五月・原題「ある女の一生——『有明けの別れ』の中務卿宮北の方」

注3 『在明の別』と『今とりかへばや』の類似点については、つとに米田(旧姓・原田)明美氏による指摘がある(『有明けの別れ』と『とりかへばや』・『有明けの別れ——ある男装の姫君の物語——』所収)。

注4 今井源衛氏は、『今とりかへばや』のこの場面に関して、こうした垣間見の形は作り物語には少なく、歌物語に多いものであると述べる(『鑑賞日本古典文学堤中納言・とりかへばや物語』・角川書店・一九七六年十二月)。そして、これらの場面に類似するものとして、『源氏物語』「花宴」巻での光源氏と朧月夜の出逢いを挙げる事ができる。

いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦じて、こなたざまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へる気色にて、「あなむくつけ。こは誰ぞ」とのたまへど、「何かうとましき」とて、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契り
とぞ思ふ

とて、やをら抱き降ろして、戸は押し立てつ。(『花宴』巻・三五六頁)

注5

朧月夜は、元々后がねであり、後に尚侍となりながらも、光源氏との関係を継続しようという姿勢をみせる女性である。性愛という観点においてこれらの女性は類似しており、そうした性愛を求める女性の、男性との出逢いの場面として、『今とりかへばや』が『源氏物語』のこの場面を意識した可能性がある。「女たちの世界——『在明の別』が描いた〈女性同士の夫婦〉から」・『中世王朝物語の新研究』・新典社・二〇〇七年十月。宮崎氏はまた、その萌芽を、『源氏物語』の宮の御方に見ており、この傾向が『我が身にたどる姫君』の女帝と藤壺皇后においてさらに押し進められたと述べている。宮崎氏は他にも、承香殿の女において、『在明の別』における『今とりかへばや』の受容を考察している(『承香殿の女』の行方——『在明の別』における『とりかへばや』受容の一端——『文献探究』四七号・二〇〇九年三月)。

注6

右大将と対の上が親密な関係を築いた理由に関して、注5「女たちの世界——『在明の別』が描いた〈女性同士の夫婦〉から」において宮崎氏は、女院となったかつての右大将が、実はかつて天女であったと巻三で判明することを踏まえて、

主人公(右大将のこと…筆者注)の前世が天女であるならば、その主人公と「昔の世ゆかしき契りのほど」(一九〇頁…筆者注)で結ばれていた——前世で何らかの繋がりを持っていた——らしい対の上の前身もまた、天女であったのかもしれない。対の上はこの天人降下事件の前年に死去しており、女院の袖の上に花を奉った天女こそ、対の上が天上界に転生した姿で、主人公と対の上とが不思議なまでに惹かれ合う「昔の世ゆかしき契りのほど」の由縁は、天女の詠歌にある、主人公と天女とが一緒に花を手折った「昔」

にあり、現世での二人の強い結びつきは、天上界で共に過
ごしていた前世からの宿縁によるものだった、とも想定で
きようか。

と述べる。

義父である左大将との関係について、対の上は「ただ恐ろしく、
「かなし」とのみ思ひまごへる」(四八頁)というようすであつ
た。対の上の母親は左大将と再婚しており、自らの母親に自分
と左大将の関係を知られることを、対の上は恐れていた。こう
した状況では、たとえその逢瀬が繰り返されたものであっても、
対の上が左大将に靡くことは考えにくい。

注 7

『在明の別』における「おほじか」という表現は、他に、

さるは、齢のほどうちあひ、少しおほじかなるさまをもて
つけたらば、心とまらずしもあるまじき人柄を、(二五六
頁)

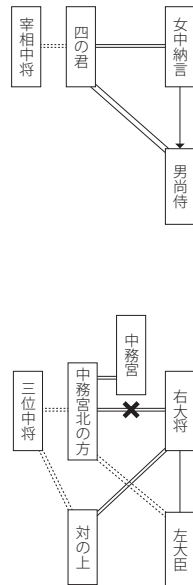
「今は、かうにや」と、思ひとぢむるほどを過ぐさず、ほ
のかに聞こゆる馬の音に、心をのべて、また、さりげなく
おほじかにもてなす。(三三〇頁)

が存在する。前者は中務宮北の方に対する左大臣の評価であり、
後者は訪問した左大臣に対応する三条の女のようなすである。ど
ちらも「おほじか」が特定の人物の性質を表したのではない。
ここまで述べてきたことをもとに、『今とりかへばや』と『在
明の別』の系図を描くと次のようになる。『在明の別』が『今
とりかへばや』を踏まえつつ、独自に変奏させている様がわか
る。

注 9

『今とりかへばや』

『在明の別』



注 10

対の上が性愛を拒絶する女性である、とは断言できない。確か
に性質は「おほじか」であり、自ら性愛を求めるとは考えに
くいが、その一方で強く拒否することもできない女性であつ
た。だとすれば、三位中将との逢瀬を繰り返していたらどう
なっていたか、右大将と契りを交わせる関係であればどうなっ
ていたのか、等については異なる展開の余地が残る描き方であ
る。作中での契りは、対の上にとって一方的な暴力でしかな
かったが、そうではなくなる可能性について、作中では直接的
な言及をしていない。

注 11

右大臣の大君に対する「気高し」という表現に関して、辻本裕
成氏は、『源氏物語』の葵の上からの表現上の影響を指摘して
いる(『王朝末期物語における源氏物語の影響箇所一覽』・『国文学
研究資料館文献資料部調査研究報告』一七号・一九九六年三月)。
これを受け、宮崎裕子氏は、大君が「生霊事件を生き延びた葵
の上」であると述べている(『甦る葵の上——『在明の別』が描い
たもう一つの「葵の上物語」・『語文研究』一〇四号・二〇〇七年
十二月)。

注 12

「中世王朝物語における物の怪——六条御息所を起点として」・
『中世の王朝物語享受と創造』・臨川書店・二〇一七年五月、初

注13 出『世界の中の『源氏物語』——その普遍性とその現代性——』、
臨川書店・二〇一〇年二月

『源氏物語』「夕顔」巻で、夕顔が某院の霊に取り殺される事件について、ここで夕顔を取り殺した霊と六条御息所とは関係が如何なるものかは曖昧であり、六条御息所本人にその自覚が皆無なまま、夕顔を取り殺した、と考えることもできる。そして、『在明の別』で北の方の生霊が取りつく四条の上は、この夕顔を意識して造型された人物であると考えられる。注11で触れた右大臣の大君に対する葵の上の影響と合わせて考えると、『在明の別』では、某院の霊を六条御息所のものとして扱い、『源氏物語』における三つの事件を一つの事件とし、取りつく側と取りつかれる側それぞれに『源氏物語』の人物を意識させたと考えられる。

注14 六条御息所を「待つ女」の苦惱」という視点でみるものとしては、吉田幹生氏の「六条御息所の人物造型——その生霊化をめぐる」(『日本古代恋愛文学史』・笠間書院・二〇一五年一月、初出『国語と国文学』七六卷一二号・一九九九年十二月)が挙げられる。

注15 田淵句美子氏は、『無名草子』の批評態度においては、男女という性別は問われていないと指摘する(『無名草子』の視座——物語と教育を繋ぐ・『女房文学史論——王朝から中世へ——』・岩波書店・二〇一九年八月、初出『中世文学』五七号・二〇一二年六月・原題『無名草子』の視座)、『無名草子』において非難されるのは、女性ばかりではなく、光源氏でさえその対象になっている。また、右大将は中務宮北の方を嫌悪するが、それは北の方だけに向けられたものではなく、一方的な密通をする叔父の左大将、嘘をつき女性のもとを去る三位中将など、男性にも向

けられるものであった。性別問わず、性愛を優先し、誠実でないことを嫌悪する点において、右大将も『無名草子』も同じ立場を取っているといえる。

(こまつ あすか・本学大学院博士後期課程)